【ポスター発表】

精神障害者家族の意識変容過程に関する質的研究

－家族会に参加する父親へのインタビュー調査から－

○　東洋大学大学院　　丸山　恵理子（会員番号 9872）

キーワード：精神障害、家族、複線径路・等至性モデル

１．研 究 目 的

平成 4 年の「生活のしづらさなどに関する調査（全国在宅障害児・者等実態調査）」では、精神障害者全体の 67.7%に同一世帯者がおり、その 56.2%が親と同居していることが分かっている。このような居住状況から、本人を含めた家族間の関係が一定程度、精神障害者本人（以下、本人とする）および家族に影響し得ると推察できる。精神保健福祉領域において、家族関係に関する研究蓄積では、とりわけ、最も家庭内労働負担が重く、当事者との密着が強い母親に焦点が当てられてきた。一方父親は、未だ根強く残る性別役割分業意識からみても、家庭内において主たる介助者である母親の副次的な立ち位置に置かれ、家族の中でもキーパーソンとみなされにくく、父親に焦点をあてた研究は少ない。しかしながら、家庭における経済主体を担うことが多い父親は、一定の影響力を持つ。そこで本研究では、精神障害者家族における父親の意識に焦点をあて、その変容過程を検討する。

２．研究の視点および方法

本報告では、セルフ・ヘルプ・グループへの参加という支援資源へのアクセスが、人生の捉え方といった主観的次元にも関連することを仮説として検証する。本調査では、精神障害者の家族支援に関して、特に父親の意識に焦点を当てて、父親として実際に精神障害に向き合う当事者家族の中で何を思い、どのように動いたのかといったことについての語りを引き出し、その後どのようにして家族会に参加するようになったのか、参加してみて何を感じているのかといった点に着目して分析する。

調査は、精神障害者の家族会に定期的に参加している父親 3 名に対して、半構造化面接を行った。分析は、複線径路・等至性モデル（TEM：Trajectory Equifinality Model）を採用した。聞き取った内容を、父親の思いやその背景に着目し、家族会に参加した前後で、どのような人生の経路をたどり、そこにはどのような促進要因や阻害要因があったのかを可視化した。その上で、セルフ・ヘルプ・グループへの参加を契機とした、親の意識変容について検討を行った。

３．倫理的配慮

本調査は、日本社会福祉学会の「研究倫理指針」に則り、かつ東洋大学の研究等倫理委

員会にて承認を得た上で、調査時の心理的負担への十分な配慮、プライバシーの確保を徹底し、実施した。研究結果を公表する際には匿名化を徹底しており、本報告についても公表の同意を得ている。なお、本報告に関連し、開示すべきCOI関係にある団体などはない。

４．研 究 結 果

本調査から得られた父親の意識変容過程において、精神疾患についての理解を深めながら、子の思いに気付くといった過程を辿ることが明らかになった。父親は家族会に参加し、癒される経験や精神疾患に対する知識を得ることで、なぜ我が子がこのような言動を起こすのかといった子が抱える背景や思いに気付き、子の思いに寄り添うように自身の理解を深化させていた。その過程の中で、父親自身の考えや思い、それに伴う行動に最も変化を与えたのが父親の懺悔であった。

５．考 察

本調査で得られた結果を、①心からの謝罪、②子との心理的な距離の2点から考察した。

①心からの謝罪

多くの父親が我が子の発症当初、「学校には行くべき」などのように、社会的規範に則り、子の行為に対して規則性を持たせようとする言動が多くみられた。これには、父親に寄せられる社会的期待が大きく影響しており、父親自身が職業人として得た、社会規範を基に形成された主観的規範(以下、「べき論」とする)が関わっている。この「べき論」が家族会での交流や学びによって崩壊し、当時の我が子に対する対応と向き合い、心から悔い改め、ありのままを受け入れて我が子に謝罪することができるようになる。このように肯定的に受け止められるようになることで、子に対しての同様の経験をしている当事者家族のために活動していきたいという思いに至ることが明らかになった。

②子との心理的な距離

多くの父親が我が子との関わりを母親に任せきりとなってしまっていたことを語っていた。ケア役割の大半を母親が担うため、父親は物理的に子との接触時間が少なく、母親のように子に包絡されることも少ないため、当事者との心理的な距離は変わらない。父親は子との心理的な距離があるために「べき論」を持ち続けられたが、父親の「心からの謝罪」は、子に包絡されることなく、適度な心理的距離を保ったままであるからこそ生まれるものであり、このような状況においては、父親独自に生まれる意識の一変容過程であるといえる。